

暴走

許すまじ

水産加工の担い手を中心に 広がる「応募撤回」のうねり



寿都湾沿いに林立する風力発電所。全国に先駆け町が運営し、成果を上げてきた。洋上風力構想を模索する過程で、核のゴミ、処分地の「文献調査」に向けた、国やNUMOの「撒き餌」に飛びついてしまった

8月13日の北海道新聞が後志管内寿都町が、核のゴミ「最終処分」に向けた「文献調査」に応募を検討中であることを報じて以降、この問題が全国に大きく発信されている。片岡春雄町長の頑な姿勢は住民の反発を招き、水産加工業者や主婦らが立ち上がり、「子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会」が誕生。「町議会の全員協議会の議事録の公開を」「町長だけの判断で応募できるのは法律の欠陥」「文献調査だけで20億円を支払う制度はおかしい」などと主張し、住民投票条例の直接請求や署名活動、講演会の開催などを通して運動の輪を広げてきた。水産業が盛んな寿都町を訪れ、この問題に対する「町民の会」の人たちの率直な声を聴いた。(ルポライター・滝川康治)

水産加工の若手や女性が参加 小泉元首相の講演会に手応え

寿都は道内でも古い歴史を持つ港町である。取材に訪れた筆者は、明

治期から戦前までの写真を一冊にまとめた『寿都歴史写真集』を「道の駅」の売店で買い求めた。編著者の山本竜也さんは、こう記す。

「……約半世紀のあいだに、この町

は、ニシンの豊漁によって人々を引き寄せ、不漁によって人口の流出に見舞われた。また、わずかな平地をもつだけであるが、開拓にたずさわる人がそこに現れ、鉄道誘致に失敗すると、自力での鉄道敷設に踏み切り、鉱業資源を求めて町の直下を掘る企業もやってきた。ニシンの不漁後は、船入瀬を築造し、沖合漁業への転換を図った……」

10月29日夜、町内の会館で開かれた「町民の会」の集まりでは、数日後に開催する小泉純一郎元首相の講演会の打ち合わせが行なわれた。参加者は20代から70代までの町民10数人。女性の姿が目立ち、隣室から子どもたちの声が聞こえる。講演会の反響は大きいようだ。地元・周辺町村の首長や議員にも招待状を送った(11月3日の小泉氏講演会には400人余りが参加した)。

会議が一区切りして、共同代表の一人で寿都ブランド「寿かき」が名物の食堂を営む吉野寿彦さんが「俺は町長を下ろすまで酒を止めているんだ」と話すと、笑い声が上がった。

80年代から幌延での「核のゴミ」施設反対運動に接してきた筆者は、寿都の人たちの心意気に希望を感じた。幌延では労組員が中心になり、酪農家や北大演習林の関係者らが参加したが、商業者が反対の意思を示すと圧力がかかった。その点、寿都は水産加工業者の若手・中堅が意欲的で、女性の参加も多い。問題が長期化した場合、政府やNUMOの動きをはね返す力になるだろう。

「裏方で若い人たちを支える」 Uターンした宿泊業者の思い

「調査に応募して」バンドラの箱を開ける前に片岡町長はやることがあったはずだ。核のゴミの発生源である原発を止めずに、うちの町に受け入れようとすることが理解できない。だから、(町長が出席した)説明会で「プロセスが違うよ」と何度か問い質したのです」

と話すのは、「町民の会」の最年長会員でペンションを営む樋谷和幸さ

ん(1948年、旧磯谷町(現寿都町)生まれ)である。物心がついた時にはニシン漁の賑わいは消えており、半農半漁の父母は自身を筆頭に3人の息子を育てた。寿都高校を卒業して郵便局に就職し、札幌を拠点に函館や帯広、旭川などを転勤。労働運動にも奔走した。

58歳で早期退職して郷里に戻り、寿都湾を一望できる高台で13年前からペンションを経営する。開業時から片岡町長は良き理解者であり、「ここが出来たのも彼のお陰という面もある」と思い、後援会にも入った。

おいしい地元の魚介類や家庭菜園で採れた野菜などを提供し、宿泊客に喜んでもらうのが樋谷さん夫婦の生きがいだ。そんな充実した生活に水を差す話が「応募検討」の報道だったが、あくまでも文献調査の話だと言うが、調査が進めばどうなるかわからない。反対する覚悟を決めた。しかし、労働運動には参加したが、住民運動の経験はない。途方に暮れていたある日、水産加工協同組合の若手が反対署名に取り組んでいることを知る。「若い人たちに協力し、裏方で支えたい」と考え、「町民の会」のメンバーになった。

「文献調査」の応募検討が報じられてから3週間後の9月4日、水産加工協同組合の青年部員や主婦、定年退職者ら30人ほどでつくる「子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会」が誕生した。町主催の説明会での意見表明や反対署名集め、学習会などに取り組み、片岡春雄町長による応募表明(10月8日)の直前には、賛否を問う住民投票条例の直接請求の署名簿も提出している。



「町民の会」には若手の水産加工業者や女性たちの姿が目立ち、小泉元首相の講演会の準備を進める



「裏方で若い人たちを支えたい」と話す榎谷和幸さん。定年前にUターンし、磯谷地区でペンションを営む

3日間で214人の署名が集まったという。それでも、片岡町長は応募を表明し、同9日には上京して応募書類を提出した。

「町民の会」は当初、水産加工業の若い人たちが多かった。しかし、それだと軽く見られると考え、年配の高い吉野さんらを入れ、4人の共同代表に移行したという。

「会員には、子育て世代の母親や若い加工業者が多く、(札幌圏など)都市部の人たちの応援もある。本当に恵まれた会で、これからの住民運動のモデルになると思います」と、榎谷さんは確かな手応えを感じている。

住民投票条例の制定も請求 問われる役場と議会の対応

「町民の会」は、町長が応募してしまっただけでは駄目だと思い、10月初めに「町民の会」は東京の原子力資料情報室の共同代表・伴英幸さんの講演会を開いた。動員したわけでもないのに、200人以上の町民が参加してくれた(榎谷さん)。町長の応募表明は10月8日と報じられるや、「町民の会」は調査の受け入れの可否を問う住民投票条例の直接請求に必要な署名を集めて町に提出した。実質

住民投票条例案は11月11日からの

町議会に上程され、同13日にも採決の予定という。本誌の発行時には、その結果が判明しているだろう。

冒頭の会合が持たれた日、「町民の会」は全議員(9人)に対し、条例案への賛成を求める全6ページ「要望書」を提出した。今年2月から8月にかけて、町議会の全員協議会で「核のゴミ」最終処分場問題をめぐり議論が行なわれていたが、その議事録は公開されていないこと、さらに片岡町長が応募を表明した10月8日の同協議会も非公開で、議員による議決も行なわれなかった——といった経緯を記し、「町民の会」は次のように主張している。

「……つまり、片岡町長は町民の意見は聞き捨て、議員の議決もないまま、まったくの独断で今回の応募に踏み切ったのです。町民も議会も軽視されたのです。文獻調査への応募は、町長ひとりの判断で進められるという法律的な欠陥があり、それを逆手にとった非民主的なやり方でした。応募の根拠としたのは『私の肌感覚では町内の過半数以上の賛成を得られていると感じる』という個人的な感覚にすぎません」

「私たちは8月から9月にかけて文

献調査に反対する署名を集めていま

したが、『反対なんだけど、署名はちよつと』『勤め先から署名するな』と言われていて、『などという言葉を聞かされるのが一度や二度ではありませんでした。約800名の署名をいただきましたが、私たちの肌感覚では拙速かつ町民を無視した独断的な文獻調査への応募に反対意見や疑問をもっている人は、はるかに多いと感じます」

「町長の肌感覚と私たちの肌感覚のどちらが正しいのか、言葉で争ってもしようがありません。賛成する町民が多いのか、反対する町民が多いのか、それを把握するためには、無記名の住民投票を行なうことが一番です。賛成が多いのなら、片岡町長は胸を張って今回の応募は正しかったということができます。反対が多いのなら、応募は撤回してもらおうしありません……(要望書から)」

今回の議決の結果がどうあれ、町が応募を取り下げない限り、この問題は決着しない。町や町議会の対応、住民運動の取り組み、周辺自治体や道の動向、経産省とNUMOの対応などから目が離せない状況が続く。

(11月4日現在)

「子どもたちに核のゴミのない寿都を！ 町民の会」共同代表・南波久さんに聴く

水産業の衰退や風評被害に不安 肌感覚より民意の汲み上げを

青年部や女性らが立ち上がり「文獻調査」反対の署名に着手

——「文獻調査」応募の動きに対する思いを聞かせてください。

南波 寿都水産加工業協同組合の青年部が中心になり「町民の会」を設立しましたが、核のゴミ」という代名詞が付いた町の水産加工品は、消費者にとって良いイメージではあり

ません。家族を持ち、寿都の町で子育てをしたい人もいます。風評被害

や今後の生活への心配、「水産加工業が衰退していくのでは……」という気持ちで一杯です。不安に怯えながら

仕事をしていくことは、とてもやり切れないし、辛いですね。

——近くに泊原発がありますが、不安に思われる感覚は？

南波 「3・11」以降、皆さん

ニュースでさんさん見えています。(福島第1原発の過酷事故で)ヘリコプターから放水する先にあつたのは

「核のゴミ」ですから、利権のある業種の人とは別として、原発に賛成する人はほとんどいないのでは。原発が稼働していなくても、北海道は生きていけるわけですからね。

——水産加工業の若手が結集できた経緯を教えてください。

南波 最初に加工関係の一人の奥さんが立ち上がり、「反対署名をした

い……」と僕に相談がきたのです。(8月13日に新聞報道があり)「なんと

いうことを表明してくれただんだ」という思いがあつたので、僕が青年部

の人たちに確認すると、皆、反対だという。であれば、誰かが立ち上がる

らなければなりません。僕はずっと東京で暮らし、4年前に寿都に戻つ



講演に訪れた小泉元首相と話し合う南波久さん(右奥)
(なんば・ひさし)1961年寿都町生まれ。寿都高校、東海大学広報学科を卒業後、東京都内の広告代理店に勤務。2016年父親の他界を機にUターンし、約100年前に創業した水産加工業の老舗・南波商店の常務取締役を務めている

てきたのでしがらみもなく、「じゃ、やろうよ」という話になりました。

思いますよ。

基幹産業の水産加工を守り「ふるさと納税」にも工夫を

——南波さんの会社の創業は、かなり古い時期だったのですか。

南波 大正10(1921)年の創業で、寿都では老舗です。社長を務める従兄弟が3代目になります。

——ずっと加工業で。

南波 数の子や身欠きニンジンなども手がけてきましたが、今は生炊きシラスが中心で寿都の名産品になっています。それと、イクラの醤油漬けです。ふるさと納税の「ふるさとチョイス」で日本一になったこともあります。(4年前に)Uターンしたころ、町のふるさと納税のサイトを

矢面に立とうとする人はいなかったのですが、僕にはそんな気はなく……(笑)。

——あちこちの住民運動に接してきましたが、田舎ではそこまで吹っ切れる人は少ない。人材探しが大変という場面を何度も見ました。

南波 僕は今でも、そうした感覚はないのです。「なぜ、声を挙げないのか」「何に怯えたり、忖度するのか」と……。それらは小さなことのように思えますよ。

見て、商品のパッケージだけではなく、おいしそうな「シズル感」も表現しようと考え、役場の職員と一緒に写真スタジオに向いたりして工夫してきました。

コピーも面白おかしく、例えば魚卵を「食べてぎょらん」とか(笑)。お茶目な感じで映像はきれいにしている、という感じでね。そうした取り組みが北海道新聞に取り上げられたりして、ふるさと納税の取扱高が増えました。そんなわけで町には協力してきたつもりです。

——寿都は水産加工業者が多い町という印象を受けました。

南波 7、8軒ありますね。その他に鮮魚屋さんもある。

「肌感覚で応募」は町長の詭弁 民意を汲み上げる行政が大事

——南波さんらが「町民の会」の矢面に立ち、若手が頑張っているわけですが、実際に署名集めをする、壁があるとも聞きました。

南波 基本は反対だけれど、「あの人に世話になった」とか、町長を支持する議員の関係で署名はできないとか。「これが田舎のハードルなんだな」と思いましたね。

——片岡町長が「文献調査」に応募したことに対する評価は。

南波 あれは、町の方針ではなく、町長個人の「肌感覚」で応募したものと受けとめています。

——個人プレーの色彩が強い、と。

南波 個人プレーというより独裁的で、民意が反映されていません。町民ではなく、国のほうを向いているのです。「町民の51%以上の反対があれば応募しない」と、何度も説明会で話しておきながら、その方法も示さず、「肌感覚で賛成多数」みたいな詭弁を言う。肌感覚で行政をやられたら堪ったものではありません。町民のため一人一人の声を聴くのが町長の仕事だと思えます。

——田舎の町では「国についていけばいい」という感覚の首長が多い。

南波 今回、そのことを初めて知りました。19年間、長期政権が続いている中で情報もきちんと公開しない。これから町が何をやるのか、ビジョンは何か——というテーマで町



寿都ブランドの水産加工品「生炊きしらす佃煮」は伝統の製法で作られる(「道の駅みなとま〜れ寿都」で)

民との懇談会も開いていません。

——民意を下から汲み上げることが大事、ということですね。

南波 (風力発電など)自分の功績に自惚れているんじゃないですか。でも、今は時代が違います。

——南波さんのような感覚の住民が増えると、町は変わるのでは。

南波 幌延は核のゴミなしを前提にやっていますが、こっちはありが前提ですからね。だから、ここで

(片岡町長に)撤回してもらわないと、恐ろしいことが起きます。

——「住民投票条例の直接請求が町議会で可決されるのは難しい」との一部報道がありましたか。

南波 町民が直接請求をしたものを可決しない議会なんてあり得ないと思います。町長は暴走気味で「概要調査まで進みたい」「次の町長選にも出る」と言いました。でも、最終処分法には「概要調査」まで進んだ段階で、「住民投票をやる」とは書かれていません。こんな無責任な話はないですよ。

——「文献調査」に反対する町長を誕生させたあと、理事者側か議会側あるいは双方で「核のゴミ拒否条例」を作り、それを踏まえて国に調査の返上を申し立てる、と。そうやっていくと、政府やNUMOも先には踏み込めないと思います。

南波 僕らは、最終処分法の下でしっかりと寿都町を除外をしてもらいたいと考えています。

(10月29日、寿都町内で収録)

■「子どもたちに核のゴミのない寿都を! 町民の会」フェイスブック
<https://www.facebook.com/106569234530018/>

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。